アルタイ諸語における「文の辞典」

福盛貴弘・Deniz BÖKESOY・宇都木昭・高慧禎

1. 研究概要

本研究は、H.Frei 氏の Le livre des deux mille phrases.(2 千文の本)における基本的枠組を踏襲した対照研究用の「文の辞典」を構築することが主たる目的である。

Frei(1953)は、これまでの「辞典」が「単語（語彙)」のみを取り扱ってきたのに対し、「文」レベルでの辞典を模索した先駆的功績である。これは、単に「単語」だけでの語彙情報からは分かりえない、文脈に依存した語彙の使われ方を確認するために重要であると考えられる。この点については、21 世紀を迎える現在、「単語」のみを扱うのではなく、見出し項目として「句」や「節」を取り入れた辞典、さらに談話研究の進展により「文」「文章」レベルでのコーパスも作成されつつあり、「単語」だけで研究を進めることの不備を補う方向にあるといえよう。しかし、それらは各々独自の基準によって作成されたものであるため、特に通言語学的研究、とりわけ同系統だと推定される言語間の類似性および相違性を扱いたい対照研究においては、適用するにあたって再整理あるいは追調査を行わねばならず、非常に効率が悪い。故に、ある程度一定の基準に沿った言語資料があれば、こういった研究での有用性が非常に高くなるだろうと感じ、同時に現在作成する必要性も痛感した。

この点は、フレ(1971)における序言で示された 3 つの目標に負う所が多い。その序言を以下に引用する。

> 1.ただひとりの人物の話し方に基いて、東京で話される日本語の組織的な研究を可能にすること。
> 2.日本語の他の諸相(他の都市、地方方言、諸社会階級、女性・子どもの話し方)の調査のための質問表、したがって出発点として役立つこと。

3.このようにして収集した資料を扶けとして、日本語の構造を他の言語と比較することに役立つこと。

そこで、この目標を基本方針として、アルタイ諸語における「文の辞典」の作成に取りかかったのである[1]。

2. 調査概要

Frei(1953)は、早稲田大学語学研究所が刊行を受諾することによって、1971 年に『日本語 2 千文』として日本語に適用された。同書には、1971 年までにイギリス英語・アメリカ英語や中国語など 9 言語に適用した報告が記されている。その後、城生佰太郎氏によって、1975 年「モンゴル語 2 千文 (1)」が発表された (城生(1975))。この両研究が本研究の直接的な契機となっている。

この両研究は、以下の点で本研究に有利に働く。

(1) 調査者・被調査者が日本語に通じていれば、日本語を媒介言語として調査を進めることができる。この点で、日本人にも調査がしやすい環境が整ったといえる。

(2) 既にモンゴル語に適用されているので、他のアルタイ諸語への適用に対する動機が高まる。また、モンゴル語への適用を参照することで、調査を進めやすくなる利点がある。

---

[1]本調査は、2000 年度に筑波大学大学院文芸言語研究科で城生佰太郎先生によって開講された「一般言語学特講」を利用して、主に進めてきたものである。トルコ語に関する調査は福盛と Bökesoy が、朝鮮語に関する調査は宇都木と高がとりおこなった。城生先生にはモンゴル語に関するデータをご提示いただくとともに、Frei(1953)におけるフランス語の解釈にもご協力いただいた。さらに、本調査に対しても貴重なご教示をいただいた。また、この講義に出席された佐々木冠氏からも、講義中に有益なご教示をいただいている。この場をかりて、改めてお礼を申し上げる。なお、それぞれの言語における文例の報告は別稿に譲るが、本調査におけるデータの誤りがあれば、その責任は全て筆者らにある。

Frei 氏の先駆的試みを積極的に適用した先行研究のおかげで、少なくともこれら 2 つの条件が整った。さらに本研究を遂行しようと立案した後、トルコ人・韓国人のネイティブスピーカーが講義に出席するという環境が整った。本調査では、まず同一人物、すなわち個人語の言語体系を徹底的に調査するというのが根幹となる。そこで、筆者らは、フレ(1971)を基に、適宜 Frei(1953)を参照しながら、対面調査によって文例の調査を進めていった。また、「アルタイ諸語」という呼称についても、比較言語学的系統論による分類呼称としてではなく、河野 (1989)にみられる「アルタイ型」の概念に準じた類型論的呼称を基盤とした[2]。

さて、実際の調査についてだが、個々の言語に関する情報の詳細は、それぞれ別稿に譲ることにし、全体で行った調査の流れを簡潔に示す。

(A)　各言語担当の調査者・被調査者が対面調査によって、文例をあげていく。その際、『日本語 2 千文』を基にし、調査者がその文の意味および推測できる場面・状況を媒介言語である日本語で行う。

↓

(B)　文例が複数例あがった場合には、基にした日本語文の逐語訳的文例よりも、被調査者にとってその状況下で最も自然度の高い文例を選択してもらう。

↓

(C)　選ばれた文例を示し、全体で検討する。その際には、各言語の調査者・被調査者だけでなく、他言語の担当者も含めて、(a)状況説明に不一致がなかったか、(b)調査が妥当であったか、を中心に相互確認する[3]。

---

[2]河野 (*ibid.*) は、比較言語学的系統論ではなく統語的原理の特徴に基づく類型論的分類により「アルタイ型」という類型を立てている。河野氏によれば、「アルタイ型」の言語は「連辞的な (syntagmatic) 」統語的原理を備えているなどの特徴を持つ言語で、チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族のほかに日本語や朝鮮語などが含められるという (河野(*ibid.*:1577ff.))。

[3]例えば、「頭の上から日がかんかん照りつけている。」といった例文の調査であれば、調査時点でどのような説明をしたのか相互に確認しあい、時には以下に示す図を使って状況を確認するといったことを(C)で行い、(D)に進んだ。

↓

(D) 日本語・モンゴル語・トルコ語・朝鮮語の 4 言語における文例を対照し、それらの類似点および相違点を検討する。

↓ ↓

↓ (E) 不備があれば再調査。→(A)に戻る。

↓

(F) 再び(A)に戻り、次の文例を調査する。

一度に多量を扱うことはできず、また初期の段階では慎重に検討を重ね調査を進めるほうが賢明と判断したため、以上のような手順でことを進めた。

さて、調査項目についてであるが、まずA.人間とB.自然と抽象概念に大別され、それを基に下位分類が行なわれ、それらの項目に従って、文が配列されている。ここでは、その目次を以下の表 1 に列記しておく。

表 1·1:フレ(1971)における目次(=調査項目)

A.人間

Ⅰ.からだ

1.頭・顔 2.目 3.耳 4.鼻 5.口 6.飲食 7.胴 8.手 9.足 10.血・肉・骨 11.体格 12.睡眠・休息 13.健康 14.性・誕生 15.年齢 16.生死

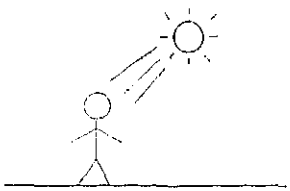

図: 「頭の上から日がかんかん照りつけている。」における状況を確認する絵

表 1-2:フレ(1971)における目次(=調査項目)

Ⅱ.衣食
17.料理　18.食事　19.食物　20.料理の材料・調味料
21.くだもの・デザート　22.飲み物　23.喫煙　24.医学　25.繊維製品
26.服装　27.服飾品　28.化粧・装身具　29.下着・洗たく
Ⅲ.住居と輸送
30.住居　31.家屋　32.設備　33.家具　34.町　35.交通
36.道路　37.鉄道　38.航海　39.航空　40.郵便・電報・電話
Ⅳ.産業・経済
41.行動・仕事　42.工業・技術　43.道具・容器　44.武器　45.所有
46.お金　47.収入・支払い　48.商売
Ⅴ.社会生活
49.家族と親せき　50.個人と集団
51.礼儀と儀礼的表現　52.あいさつ・呼びかけ　53.訪問　54.娯楽・スポーツ　55.地位
56.和・不和　57.社会的束縛　58.法律・裁判　59.軍隊
Ⅵ.精神活動
60.意志・欲求　61.感情　62.快・不快　63.対人感情　64.価値判断　65.注意
66.思考　67.知識　68.記憶　69.想像力　70.性格・道徳　71.宗教
Ⅶ.表現・伝達
72.表示　73.言語　74.会話　75.応答
76.肯定・否定　77.真実性　78.文字　79.文学　80.芸術
81.音楽　82.美醜　83.教育・出版・報道
B.自然と抽象概念
Ⅷ.生物と事物
84.大地と自然　85.物質　86.植物　87.農業　88.動物　89.水　90.狩り・つり
91.空気・風　92.太陽と雲　93.天候　94.気温　95.天体

表 1-3:フレ(1971)における目次(=調査項目)

IX.現象
96.感覚・知覚　97.光と視覚　98.色　99.音　100.におい
101.味　102.温度　103.重さ　104.密度　105.固体・液体・気体
X.空間
106.寸法と形　107.点・線・面　108.立体　109.位置　110.接触・分離
111.距離　112.高さ　113.方位　114.線の種類　115.内と外
116.方向　117.運動　118.場所の多少　119.空間の測定　120.空間の利用
XⅠ.時間
121.時間と持続時間　122.日時　123.時の単位　124.時の関係　125.行為の進行段階
126.速度・頻度　127.時間・事件の限定　128.時間の利用
XⅡ.順序・量・質
129.秩序・規則　130.継続・順番
131.分類　132.分量・強調　133.量の比較・増減　134.共存と欠如　135.全体と部分
136.数量　137.数字　138.量の多少　139.質・やり方
XⅢ.存在と関係
140.存在　141.関係　142.状態と行動　143.交替　144.強さ　145.因果関係
146.目的　147.仮定・帰結　148.論理的状態　149.一致・不一致　150.定・不定

3. 対照研究試論

日本語・モンゴル語については、先述したとおり既に公表されている。そこで、ここではこれらを援用し、今回の調査によって追加されたトルコ語・朝鮮語を加えた 4 言語間における対照研究を一部示していきたい。ひとまず、表 1 に示した「A.人間　Ⅰ.からだ　1.頭・顔」における 8 文×4 言語＝32 文を例示し、検討してみたい。

以下に、日本語(共通語[4])・トルコ語(標準語)・モンゴル語(標準語)・朝鮮語(韓国標準語)の順で、文例を列記していく[5]。

1.
(日)頭の上から日がかんかん照りつけている。
(ト)Baş-ım-ın　üzeri-ne　cayır cayır　güneş　vur-uyor.
　頭-(1 単所)-(属)　上-(与)　かんかん　日　照る-(継続)

(モ)Толгой дээр-ээс нар　шар-ж　байна.

　頭　上-(奪)　太陽　焼く-(結合)　いる

(朝)머리 위에 햇볕이 쨍쨍 내리쬐이고 있다.

　meli wi-ey　hayspyeth-i　ccayngccayng　nayliccoyi-ko　iss-ta. [6]
　頭　上-(与)　日光-(主)　かんかん　照りつける　(継続)-(下称)

---

[4] 「標準語」「共通語」という呼称について若干触れておく。前者と後者を[±人工的]で扱う議論や、後者が「標準」に対する抵抗意識の回避など様々な議論があるが、筆者(福盛)は以下のように考える。「標準語」は「規範性」を、「共通語」は言語使用域で「実際に(異なる方言話者がそれを用いて)互いに通じるか」を内包していると捉えている。その意味で、両者は共存しうるものである。ただし、後者は言語使用域で現実に普及していなければ不適当な呼称となる。そこで、「共通語」に対する「代表語」という区分を提唱したい。「代表語」は規範性も互いに通じるかも含まないことを前提とし、単にある言語使用域で特定の方言を代表として扱いたい場合に用いることとする。この点から、日本語は東京方言を基にした「代表語・共通語」、トルコ語はイスタンブル方言を基にした「代表語・標準語・共通語」、モンゴル語ハルハ方言は「代表語」、朝鮮語ソウル方言は韓国における「代表語・共通語」と扱う方が妥当である。詳細な議論は今後の課題とし、本稿では慣例に従った。

[5] (　)で括られているのは、主に付属語あるいは接辞の意味・機能である。自立語の意味・機能を示す場合も同様にした。なお、本文で用いた略号は以下のとおりである。

(主)=主格、(対)=対格、(与)=与格、(奪)=奪格、(共)=共同格、(題目)=題目化(topicalization)、(1)=1 人称、(3)=3 人称、(単)=単数、(複)=複数、(所)=所有接辞、(限定)=限定接辞、(再所)=再帰所有接辞、(下称)=朝鮮語において文末用言の語尾に現れる待遇表現で、自分と同等以下の相手に対して用いられる表現、(結合)=モンゴル語学で結合の副動詞形と呼ばれるもの。例えば、「A-(結合)　B」なら、A と B は時間的に重なることなく、連続して行なわれる状況を指す。(連用)=連用形

[6]本稿における朝鮮語のローマ字表記は Yale 式 (Martin et al. 1967) を用いる。

2.
(日)髪の毛がちぢれている。
(ト)Saç tel-ler-i kıvır kıvır.
髪の 毛-(複)-(3 単所) ちぢれている

(モ)Толгой-н үс нь эрчил-ж байна.

頭-(属) 髪の毛 (題目) ちぢれる-(結合) いる

(朝)머리가 곱슬이다.

meli-ka kopsuli-ta.
頭-(主) ちぢれている-(下称)

3.
(日)あの人の頭のてっぺんは髪の毛が薄いね。
(ト)Baş-ı-nın üzerin-deki saç-lar seyrek, değil mi?
頭-(3 単所)-属 上-にある 髪-(複) 薄い だね

(モ)Тэр хүн-ий зулай-н үс шингэн.

あの 人-(属) 頭頂部-(属) 髪の毛 まばらだ

(朝)저 사람 머리 위쪽에 머리카락이 조금 남았네.

ce salam meli wi-ccok-ey melikhalak-i cokum nam-ass-ney.
あの 人 頭 上-の方-(与) 髪の毛-(主) 少し 残る-(過去)-ね

4.
(日)おでこをなぐられた。
(ト)Aln-ım-a vur-ul-du.
おでこ-(1 単所)-(与) 殴る-(受身)-(過去)

(モ)Магнай-гаа алгадна.

額-(再所) なぐる

(朝)이마를　　맞았다.

ima·lul　　mac·ass·ta.
おでこ·(対)　なぐられる·(過去)·(下称)

5.
(日)顔がしわくちゃだ。
(ト)Yüz·ü　　kırış kırış.
顔·(3 単所)　しわくちゃだ

(モ)Нүүр нь　атир-аа　дүүрэн.

顔　(題目)　しわ·(再所)　いっぱいな

(朝)얼굴이　주름　투성이다.

elkwul·i　cwulum thwusengi·ta.
顔·(主)　しわ　だらけ(だ)·(下称)

6.
(日)顔色がよくなった。
(ト)Yüz·ü·nün　reng·i　düzel·di.
顔·(3 単所)·(属)　色·(限定)　治る·(過去)

(モ)Царай сайн бол-сон.

顔色　よく　なる·(完了)

(朝)안색이　좋아졌다.

ansayk·i　cohacye·ss·ta.
顔色·(主)　よくなる·(過去)·(下称)

7.
(日)あんまりこわくて、顔がまっさおになった。

(ト)Öyle kork-tu ki yüz-ü mas-mavi ol-du.
あんまり 怖がる-(過去) (接続) 顔-(3 単所) まっ青 なる-(過去)

(モ)Тун аймшиг-тай царай нь хөв хөхөр-лөө.

(程度副詞) 恐怖-(共) 顔色 (題目) 真っ青-(完了)

(朝)너무 무서워서 얼굴이 하얗게 되었다.

nemu musew-ese elkwul-i hayah-key toy-ess-ta.
あまりに こわい-(順接) 顔-(主) 白い-(連用) なる-(過去)-(下称)

8.
(日)このカラーはきつくて、首が窮屈だ。
(ト)Bu yaka dar, boyn-um-u sık-ıyor.
この カラー きつい 首-(1 単所)-(対) 窮屈にする-(継続)

(モ)Энэ зах таарамж-гүй хүзүү ая-гүй.

この 襟 適当な-(否定) 首 状況-(否定)

(朝)이 칼라는 목이 조여서 답답하다.

i khalla-nun mok-i coye-se taptapha-ta.
この 襟-(主題) 首-(主) 締め付けられる-(順接) 窮屈だ-(下称)

では、この文例における文脈で、「A.人間 Ⅰ.からだ 1.頭・顔」に関する語彙が、言語ごとにどのような分布を示したのか検討する。

まず、1.「頭」と 3.「頭のてっぺん」についてである。日本語でも「頭のてっぺん」は生理学的に「頭頂部」という用語はあるが、日常的な語彙ではない。ここでは、いわゆる「頭」と「頭頂部」が日常的な語彙で区別されるかを問題としたい。この観点から対照していくと、モンゴル語のみが両者を区別しており、その他の言語では、「頭」に後置させる形で「上(の方)に」といった意味内容の語句をつけている。なお、トルコ語で「頭」を示す語は baş だけでなく、kafa もある。しかし、ここでの用法では、baş と kafa の間に

特に分布の違いはないので、baş を代表しておいた。

次に、2.と 3.における「髪の毛」をあげる。2.では「ちぢれている」、3.では「薄い」という髪の毛の状態を示しているが、これらは朝鮮語のみ「頭」と共通の語（「meli」および「meli」を含む複合語である「melikhalak」）が可能となっており、朝鮮語の「meli」の意味範囲の広さが窺知される。その他の言語では、日本語式で言えば「頭の毛」というような用い方はされておらず、「頭」と「髪」は別の語彙として分布する。また、「髪の毛」に相当する語彙を 2.と 3.の両者に用いている。トルコ語の場合、2.では「saç telleri」、3.では「saçlar」という語彙で表わされているが、これは相互に置き換えることが可能であり、「saç」という語彙以外のものが使われているわけではないので、区別されているとは扱わない。

次に、5.～7.における「顔」についてである。日本語では、「5.顔がしわくちゃだ。」「6.顔色がよくなった。」「7.顔がまっさおになった。」というように、5.と 7.では「顔」が用いられ、6.では「顔」に「色」をつけた「顔色」という語彙を用いている。ただし、基本的に 3 文とも「顔」という語彙を共通して用いていることが分かる。トルコ語も、日本語と同様の用い方をしていることが例文から判断できる。「顔色」というために「顔」という語彙を用いて表わしている点が、日本語と同じである。これに対し、モンゴル語には日本語・トルコ語と違う特徴が二つ見られる。まず、6.と 7.に見られるように、モンゴル語は「顔色」を意味する専用の語彙を有している。さらに、「顔」と「顔色」の用い方の分布がモンゴル語と日本語・トルコ語とでは異なる。日本語・トルコ語では 5.と 7.で「顔」を用い 6.のみで「顔色」を用いているのに対し、モンゴル語では 6.と 7.で「顔色」を用いている。一方、朝鮮語は、モンゴル語との類似点と日本語・トルコ語との類似点の両方が観察される。モンゴル語との類似点は、「顔色」専用の語彙を有しているという点で、6.の「ansayk」がこれに当たる。ただし、この「ansayk」は漢字語であり、漢字で表記すると「顔色」となるため、日本語・トルコ語と類似していると見ることもできる[7]。また、「顔」と「顔色」の用い方の分布は日本語・トル

---

[7] ただし、朝鮮語の「ansayk」は「an」だけで「顔」を意味する語として用いられず、純粋な複合語とは言い難い。この点においては、日本語・トルコ語とは若干の違いもある。

コ語と同じであり、日本語・トルコ語との類似点と言える。

最後に、4.「おでこ」と 8.「首」については、どの言語でも固有の語彙があり、ここに掲載したデータの範囲からは、重なるものはないと確認できる。

以上のことをまとめたのが、表 2 である。

表 2:日本語・トルコ語・モンゴル語・朝鮮語における語彙の分布[8]

	日本語	トルコ語	モンゴル語	朝鮮語
頭	atama	baş[9]	толгой	meli
頭頂部	atama(+teQpeN)	baş(+üzeri)	зулай	meli(+wiccok)
髪の毛　ちぢれ	kami no ke	saç telleri	үс	meli, melikhalak
髪の毛　薄い	kami no ke	saçlar	үс	melikhalak
おでこ　(額)	odeko	alın	магнай	ima
顔　しわくちゃ	kao	yüz	нүүр	elkwul
顔　まっさお	kao	yüz	царай	elkwul
顔色	kao(+iro)	yüz(+rengi)	царай	ansayk
首	kubi	boyun	хүзүү	mok

[8]表 2 における日本語の音韻表記の記号で、Q は促音、N は撥音を表わす。
[9]トルコ語の「頭」baş については、kafa も同様であることを本文で触れたので、表中では baş で代表させた。

4. 結語

これまで「アルタイ言語学」が歴史言語学あるいは比較言語学による系統論を中心に展開され、そこでは調音音声学・音韻論・形態論が主な役割を果たしてきた。しかし、本研究における「文の辞典」のような一定の条件下での対照研究向きの言語資料を作成することによって、アルタイ諸語間、換言すればアルタイ型言語間において別の視点、特に近年盛んな統語論や意味論による研究からより詳細な特徴をとらえうる道が拓けると確信している。本稿では、試論として文レベルにおける「語彙」の対照のみを示したが、今後他の領域でも試みる必要がある。多岐にわたる分野においての対照研究が行われれば、本研究を遂行した意義があったといえよう。

【参照文献】

Frei, Henri.(1953) *Le livre des deux mille phrases.* Genève: Librairie Droz.

アンリ・フレ (1971)『日本語二千文』早稲田大学語学教育研究所

城生佰太郎 (1975)「モンゴル語二千文(1)」『モンゴル学会報』6.

河野六郎 (1989) 「日本語の特質」、亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典　第 2 巻　世界言語編 (中)』三省堂　所収、pp.1574-1588.

Martin, Samuel E., Yang Ha Lee & Sung-un Chang. (1967) *Korean-English Dictionary.* New Haven: Yale University Press.

'The Dictionary of Sentences' of Altaic Languages

FUKUMORI Takahiro, Deniz BÖKESOY,
UTSUGI Akira and KO Hye-jung

This paper attempts to construct 'the dictionary of sentences' of Altaic languages for contrastive linguistic studies. This attempt is based on Frei (1953). He attempted to make a dictionary of sentences instead of words and completed French 'dictionary' consisted of 2,000 sentences.

In this paper, we deal with Japanese, Turkish, Mongolian and Korean among Altaic languages. We researched Turkish and Korean originally through interviews, while we utilized previous studies for Japanese and Mongolian (Japanese: Frei 1971, Mongolian: Jôo 1975). In interviews, native consultants gave researchers sentences in their native languages which correspond to the sentences in Frei (1971).

Among the sentences obtained from our original research and the previous studies, the first 8 sentences are showed, and lexicons in them are contrasted tentatively. As a result, the distributional difference of lexicons in Altaic languages is showed.

Even though the discussion in this paper is only on lexical study, we are sure that this kind of 'dictionary' will also help syntax and semantics of Altaic languages to develop.